

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

<http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/sgepss/>

第177号 会 報 2002年12月10日

目	次
会長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・1	内部磁気圏分科会の設立・・・・・・・・・・17
第112回総会報告・・・・・・・・・・2	「アジア - 大洋州地球物理学会」設立に向けて・18
第217,218,219回運営委員会報告・・・・・・・・・・3	IUGGを支援する募金のお願い・・・・・・・・・・19
評議員会報告・・・・・・・・・・7	APUAR 誌への投稿受付・・・・・・・・・・19
会計報告・・・・・・・・・・7	関連研究会のご案内・・・・・・・・・・20
規約・内規の改定・・・・・・・・・・10	人事公募・・・・・・・・・・20
日本学会議のあり方についての説明会報告・10	新規学位取得者リスト・・・・・・・・・・20
SCOSTEP 専門委員会報告・・・・・・・・・・10	広野求和氏の死を悼む・・・・・・・・・・20
長谷川・永田賞審査報告・・・・・・・・・・11	賛助会員リスト・・・・・・・・・・21
大林奨励賞審査報告・・・・・・・・・・11	大林奨励賞の推薦について・・・・・・・・・・21
大林奨励賞を受賞して・・・・・・・・・・13	学会賞・事業年間スケジュール・・・・・・・・・・22
国際学術交流事業補助金受領の報告・・・・・・・・・・15	訃報・・・・・・・・・・22
国際学術交流外国人招聘を受けて・・・・・・・・・・17	SGEPSS Calendar・・・・・・・・・・22

会長挨拶

荒木 徹

第112回講演会も3日目を迎え、周到に準備された会場で快適に過ごさせて頂いています。行き届いたお世話をして頂いている奥沢大会委員長、幹事役の福田会員、電気通信大学のスタッフと学生の方々に厚くお礼申し上げます。

世の中はデフレ対策や拉致問題で喧しく大学は2年後の独法化で揺れていますが、当学会に取って喜ばしいことが二つありました。一つは、本年4月1日付けで九州大学に学内教育研究施設として「宙空環境研究センター」が設置され、7月15日にその開所式が行われたことです。九州大学の湯元会員は、北村・国分・林会員らと高時間分解能地磁気観測の汎世界的ネットワーク構築に努めてこられました。その実績を基にこの新しいセンターを作られました。これまでの湯元会員とそのグループのご努力と九州大学当局のご理解に敬意を表し、このセンターの更なる充実・発展を期待します。

二つ目は10月1日に福西会員が“ For outstanding, lasting and influential contribution to space physics ”により、European Academy of Science のmemberになられたことです。このアカデミーは、ヨーロッパ各国の科学アカデミーとは別の権威ある組織で520名の会員からなり、ノーベル賞を受賞された野依先生は、2002年度の“Honorary life member” に選ばれておられます。当学会の当面の大問題である学会名変更については、運営委員会案の公表以来、会員の皆様から賛否両論にわたる多くのご意見を頂いてきました。学会名に関しては、学会の発展に対応するか例えばIUGGのように歴史を尊重するのか、手段や方法でつけるか対象分野でつけるか、象徴的な名前か各分野を広くカバーする具体的な名前か、短くするか少々長くても良いか等、様々な考え方・立場があり、どれを取るかにより大きく変わってきます。これは前期からの引継ぎ事項でしたので、運営委員会は、会員すべてが満足する解は無理だとしても多くの会員が「まあこれでよい」と思える名前が見つかれば改名可能と考えて多くの時間をかけて検討してきました。

しかし、現状では会員間の意見の相違が大きく、その段階に達していないと判断せざるを得ません。しかも、意見の対立がかなり先鋭で、予定通りに、この総会で決すると今後の学会運営に大きな亀裂が生じかねません。また、寄せられた意見の中には、会のあり方や運営を問い直すものもありました。そこで、運営委員会では運営の問題点も含めて改名問題を継続して考えるワーキンググループの設置を提案することにしました。運営委員会案を出した以上は、ここで決めるべきだとのご意見もありましたが、学会の最大の役目は学問実績の蓄積であり、その為には対立や亀裂を深める事を避けて議論を尽くすべきだと判断しました。

この改名問題は、我々の学会のあり方、個々の会員と学会や学会内他グループとの関係、他学会との連携や協力などを考える機会でもありますので、ワーキンググループでは、そのようなことも考えた上で良い案が出されることを期待します。

お寄せいただいたご意見の中には、「改名よりは学会統合を計るべきだ」との指摘がありました。当学会は地球物理学関連学会分立の不利とその統合の必要性を早くから認識し、学会統合に向け継続して努力してきましたが、一部の会員には十分に理解されていないようですので、ここで、その歴史を整理しておきます。1990年に、AGUと共催のWPGM (West Pacific Geophysical Meeting) が金沢で開かれましたが、AGUや関係他学会との折衝にあたられたのは木村前会長・本蔵会員でした。この他学会との共同作業を通じて、本学会(行武会長)は地震学会と共に合同講演会開催を提案することになり、関係5学会代表からなる「地球惑星科学関連学会連絡会」が作られて第1回「地球惑星科学関連学会合同大会(1990年)」が東工大で開かれました。合同大会は大学単位LOCの持回りで開き3年経ったら見直す事になっていましたが、第11回大会(2000年)まで続きました。11回中5回まで当学会会員が大会委員長を務めておられます。1996年には事務局が設置され、本蔵会員がこれを引き受けられました。1998年には、河野会長が松野気象学会会長と石田地震学会会長に呼びかけて地球物理学関連学会長等懇談会を作り、学会連合に関するアンケート調査を行われました。大学LOC持回りの合同大会運営の困難が次第に顕在化して2001年以降の大会開催の目途が立たなくなり、1999年から2000年にかけて見直しが議論されました。この中で出された「連絡会有志案」は当学会としては受入れ難く、松本会長と大村総務は対案を出して反論されました。この論争の中から「東大案」が提案され、最終的に現在の「合同大会運営

機構」方式に落ち着きました。この機構の代表は浜野会員であり、大村・中村・岩上会員が4つの部局中3部局の責任者を務めておられます。当学会は、また、力武・小口・河野編集長の下で発展し科研費補助金で高い評価を得てきた会誌JGGを提供して合同誌EPS(本蔵編集長)を誕生させてもいます。このように当学会は、10年以上前から地球物理学関係学会統合(或いは連合)を目指して努力してきました。その結果として、統合(連合)の前段階と位置づけられる「合同大会」を今後も継続して開催出来そうな状況になってきたのです。会員の皆様は、この歴史を認識し関係者の献身的努力に敬意を払って欲しいと思います。その上で、それぞれの事情から当学会ほど統合(連合)に熱心でない他学会の世論を喚起するのに協力して下さいをお願いします。

来年の札幌IUGGはアジア最初の開催であり、アジア地域からの多くの参加者が見込まれます。組織委員会は、このような参加者への援助のための募金活動を始めており、当学会にも目標額400万円が割り当てられています。これに関しては会報やメールで呼びかけ、この講演会でも受付に窓口を設けて募金を募っていますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

年末には副会長・評議員・運営委員の選挙が行われます。学会の執行部を決める大事な選挙でありますので、多くの方々の参加をお願いします。選挙の結果が確定した時点で、私の会長の任期も終了します。不十分でしたが皆様に支えられて何とか任期を全うできそうになってきました。ご協力に感謝します。

第112回総会報告

第112回総会は2002年11月11日(月)から14日(木)まで電気通信大学において行われた地球電磁気・地球惑星圏学会の3日目、15時30分から18時20分まで大学講堂で開催された。

まず柳沢正久会員による開会の辞の後、荒木徹会長の提案により中村正人運営委員が議長に指名された。奥澤隆志大会委員長の挨拶に続いて、会長から長谷川・永田賞の選考理由が報告され、國分征会員に対し、賞状とメダルおよび銀杯が授与された。引き続き、大林奨励賞の授与式に移り、第14号が篠原育会員、第15号が齊藤昭則会員に授与され、会長よりその審査報告がなされた。

会長挨拶の後、報告に移り、家森俊彦運営委員より新入会員承認や国際学術交流若手派遣申請の採択

など、前回総会以後開催された第217,218,219回運営委員会の報告があった。綱川秀夫運営委員からは、来年度合同大会開催場所が幕張メッセになった経緯が述べられた。歌田久司運営委員から、日本学術会議の改革に関する総合科学技術会議および日本学術会議双方での調査会あるいは委員会中間まとめについて報告された。引き続き、上出洋介会員から、「アジア-大洋州地球物理学会」(AOGS)設立の紹介、藤井良一副会長から、CAWSES計画の準備状況について、松本紘会員からは、URSI等電波研連関係の活動について報告された。松岡彩子運営委員からは、学会会場で行ったIUGG募金活動の状況、山崎俊嗣運営委員から、EPS誌における新しい取り組みであるE-letterやEPS賞設立について報告があった。会長からは、評議員に辞退権を認めることになったことが報告された。

議事では、まず、山崎会計担当委員から、平成13年度決算報告と平成15年度予算案の提案があり、賛成多数で両者とも承認された。この時点で、定足数222に対し、委任状144、会場出席者96、計240で、総会は成立していた。次に、品川裕之運営委員より、運営委員2名増員の提案内容が説明され、これも賛成多数で承認された。続いて、井口博夫・大村善治運営委員より、学会名変更をめぐる運営委員会および会員による議論の経緯がまとめて説明され、今後も継続して検討するために、より広い範囲の会員を含む作業委員会を、役員選挙の後、設置することが提案された。この提案に対し、特に反対意見は出なかった。議事の最後に、来年の秋期総会・講演会を、富山大学理学部にお世話していただくことが、山崎運営委員から提案され、酒井英男会員より、広岡公夫会員を大会委員長にして引き受ける用意のあることが述べられ、満場一致で賛成・決定した。

総会の最後に、松本紘評議員より、今回世話をさせていただいた電気通信大学の組織委員会に感謝の言葉が述べられ、閉会した。

総会式次第

- ・開会の辞
- ・議長指名
- ・大会委員長挨拶
- ・長谷川・永田賞授与
- ・大林奨励賞授与
- ・大林奨励賞審査報告
- ・会長挨拶

- ・諸報告
 - 第217/218/219回運営委員会
 - 来年度合同大会
 - 学術会議各研連・各国際学会等
 - IUGG募金
 - EPS報告
 - その他
- ・議事
 - 平成13年度決算・平成15年度予算案
 - 運営委員の増員
 - 学会名変更と改名問題WGの設置
 - 次期秋期総会・講演会開催地
- ・電気通信大学・大会実行委員会への謝辞
- ・閉会の辞

第217回運営委員会報告

日時： 2002年9月17日 13時00分 - 20時00分
(途中15時00分 - 17時15分学会名についての意見交換会のため中断)

場所： 国立極地研究所第一会議室

[出席] 荒木徹、藤井良一、麻生武彦、家森俊彦、井口博夫、大村善治、小原隆博、品川裕之、綱川秀夫、中村正人、橋本武志、松岡彩子、山崎俊嗣、渡部重十

[欠席] 歌田久司、小野高幸、早川基(運営委員補佐)

報告事項

(1) 前回議事録を承認した。

(2) 新入会員・退会者

下記6名の入会を承認した。

(氏名)(所属)

川野圭子 九大・理・D1

山崎健一 京大・理・D1

ESPINOSA, Stephane 東大・理

湯通堂 亨 国土地理院・水沢

川村紀子 高知大・理・M1

岡 光夫 東大・理・D1

下記7名の退会を承認した。

宮腰潤一郎 (6月1日逝去 享年73)

竹内 智 (山梨大学工学部)

渡辺政行 (岩手大学工学部)

香川晶子 (奈良女子大学理学部)

臼井義比古

ROBACH, Francis (CSME, France)

FOSTER, John (MIT, Haystack Obs., USA)

(3) 第112回総会および講演会準備状況

電気通信大学で開催予定の第112回総会・講演会プログラムの骨子について、LOCメンバーである柴田喬会員の報告に基づき検討し、了承した。また、特別講演および田中館賞受賞講演について、会員以外の一般および学生の出席を認めることを承認した。

プログラム委員より、講演会投稿論文数の報告があった。投稿総数は288件で、地球内部関係は42件、外部関係は246件。秋の大会は地球内部関係の投稿が、春の合同大会に比較して大変少ない傾向がある。これは、内部関係は、他学会との関連性が強いこと合同大会に発表する人が多いことと考えられる。

電子投稿した論文が受理（受け取り）されたかどうか確認できるように、来年度はメールで返信することにした（次回運営委員会への申し送り）。

関連して、非会員への総会会費等情報を周知するため、学会ホームページにプログラムを掲載することにした。

(4) 国際学術研究集会出席補助金申請の審査

関華奈子会員より申請のあったCOSPAR派遣（10/9-10/19、米国ヒューストン）が承認された。西田国際交流基金から15万円が支給される。1件が書類確認のため、保留となった。

審査上の便利のため、今後は申請書の業績リスト欄を大きくすること、また、論文のコピーも提出してもらうことにした。

過去に既にこの補助を受けたことのある人の申請についても受け付けて審査することを確認した。

(5) IUGG募金活動

学会として400万円を募金により集めることがノルムとして課されており、影響力のある会員を伴って今秋関連企業を訪問する予定であることが、募金担当委員より報告された。

個人募金については手続きを簡単にして、また、一口の金額を小さくして、多くの方が簡単に募金できるようにする。また、開発途上国、特に今回はアジアの諸国からの参加旅費補助の為であることをはっきりと述べて、趣旨を明らかにする。

会場展示ブースに大学等が出展費用を払えるように工夫することにより、費用を集めることも検討する必要がある。

評議員等には募金の強要はしないが呼びかける。

秋の学会の時に募金箱の設置も検討する。

(6) 学会名の変更について

運営委員会に反対意見を寄せた大気圏科学関係の会員6名の参加を求め、学会名改称問題についての

意見交換会を、当運営委員会を中断して約2時間余り開催した後、今後の運営委員会の方針を下記のように決定した。

1. 今回寄せられた意見、意見交換会で出た意見をまとめ、会員に学会HPフォーラムの場を通して周知する。

2. 同時に、運営委員会としての意見を記載する。

3. フォーラムの場を通して、再度会員からの意見を聴く。ただし、議論の堂々巡りをさけるため、既に議論が尽くされたと考えられる問題点は除外し、焦点を絞って意見を述べてもらう。

4. 10月31日17時より、通信総合研究所において、臨時の運営委員会を開催し、上記会員との情報・意見交換の結果および学会ホームページのフォーラムに寄せられた意見を参考にして、次回総会で運営委員会として提案する内容を決定する。

関連して、下記の議論を行った。

1. 運営委員の増員について：

学会運営の複雑化に伴う仕事量増加への対処、および、より広範な分野・年齢層の会員に学会運営に参加してもらうため、運営委員の数を2名増員することを検討することにした。このことは、学会名の改称問題とは直接の関連はないが、より広範な分野の意見を学会運営に取り入れるのに効果があると考えられる。

2. 評議員の増員について：

現行の評議員数は学会創設以来同数の10名であるが、分野の拡大に対応するため、数名増やすことを、会長から評議員会に提案し、議論することになった。

3. 規約等改定案：

学会名の改称が決定された場合に備え、規約改定箇所の検討を行った。

(7) 2003合同大会について

これまで会場として使用してきたオリンピック青少年記念センターは、諸般の事情により、今後会場としての使用が困難になった。合同大会運営機構が調査した結果、幕張メッセがこれまで以上に設備等がよく整備されていて、2003年合同大会開催に最適であるとの結論を得たことが報告された。オリンピック青少年記念センターに比較した場合、メリットとしては、次のような点である。

1) 会場予約が5年先まで可能であり、長期的な運営が確実になる。代々木は10ヶ月前から予約可。

2) 建物全体が貸し切りになるので、いろいろな案内が出せる。代々木では禁止されていた。

3) 各会場にメッセからの会場員がつき、プロジェクト等の操作にあたるので、トラブル対応がしやすい

い。

4)ポスター会場も同じ場所であり、かつ、ボードの間隔を広くとれる(1.5m 2m)。

ただし、参加費の早期申し込み割引率は縮小して開催費の増額分約400万円を捻出せざるを得ない。また、会議用の部屋代はこれまでに比べ割高になる。また、期間が4日間に短縮されるので、総会は夕方以降に開催せざるを得ない可能性が高い。運営委員会としては、この合同大会運営委員会提案を承認した。

9月20日の連絡会で、「2004年度以降の合同大会委員長は地球惑星科学関連学会連絡会会長が兼ねる」ことが提案される。この提案についても賛成する旨、運営委員会で決定した。

(8) 次期副会長および運営委員選挙

下記日程で選挙の準備・実施を行うことにした。

・立候補受付の案内 10月中旬

締め切り 10月31日

・選挙の公示 12月10日

投票締め切り 1月10日

名簿の印刷が間に合えば、選挙公示・投票用紙とともに発送する。

・1月下旬会報で選挙結果の公表

(9) 会報への追悼文の掲載について

名誉会員や元評議員逝去の場合は、原則追悼文を掲載する。そのほかの会員の場合も、学会活動との関連で掲載希望があれば掲載する。

(10) 次回会報

12月10日選挙公示に合わせ発行する。

(11) その他

次回選挙推薦・立候補受け付けの公示に間に合わせるため、運営委員会内規2条第3項の運営委員会投票分野を下記のように変更する。

(現行)主として地球惑星大気圏・超高層・宇宙空間物理学を研究する会員から3名
全会員の中から5名

(改正後)主として地球惑星大気圏・超高層物理学を研究する会員から2名

主として宇宙空間物理学を研究する会員から3名
全会員の中から3名

第218回運営委員会報告

日時： 2002年10月31日 17時30分 - 22時20分

場所： 通信総合研究所 6号館4階会議室

[出席] 荒木徹、藤井良一、家森俊彦、井口博夫、歌田久司、大村善治、小野高幸、小原隆博、品川裕之、中村正人、松岡彩子、山崎俊嗣、渡部重十

[欠席] 麻生武彦、綱川秀夫、橋本武志、早川基(運営委員補佐)

1. 新入会員・退会者

新入会員：

野澤宏大(東北大・理・研究生)

退会会員：

小野吉彦(元地質調査所)

2. 国際学術交流若手派遣の審査について

学生会員からの申請に関し、一定の基準を決めるべきであるとの意見があり、議論の結果、最低限、主著または共著者として論文がrefereed journalに出版または受理されていること、また、共著の場合は、その論文で果たした役割等を明らかにするため、何らかの形でヒアリングを行うことにした。

3. 学会会場でのIUGGの募金

IUGGの募金状況等について、小口の募金小口の場合は各学会毎に集めてもよいとのこと。募金で当学会に割り当てられた額を達成するのは困難な情勢なので、ブースを大学・研究機関で買うことを積極的に行うことが提案された。

11月の第112回総会・講演会会場に募金箱をおくことにした。

4. 来年度予算案について

会計担当委員より、平成15年度予算案の説明があり、了承した。

5. 学会名改名提案について

11月の第112回総会では議決のための提案は行わず、学会の将来および名前について検討するワーキンググループを、運営委員だけではなく、より広い範囲の会員からの参加を募って組織し、検討を継続することにし、総会で提案する。分野間の交流促進のため、セッション名などにも工夫をしてはどうかという提案があった。

6. 運営委員の増員について

運営委員の2名増員を次回(第112回)総会で提案することにした。会長選出枠については、従来どおり3名とする。既に行った内規の改訂については、提案に先立ち報告する必要がある。

7. 日本学術会議の改革について

先日行われた日本学術会議改革についての説明会出席の報告があった。

11月中旬に総合科学技術会議本会議で日本学術会議のあり方に関する専門調査会中間まとめが了承され、パブリックコメントが求められる予定であるので、積極的に意見を述べてほしいとのこと。学術会議内にも日本学術会議のあり方についての委員会があり、中間まとめが出ているが、いずれの案でも、研究連絡委員会はなくす方針。

8. 第112回総会および講演会準備状況

会員より、プログラムをもっと早くホームページに載せてほしいとの要望があったことが報告された。これに関しては、今回は、印刷所の都合で約1週間遅れた事情が説明された。

第219回運営委員会報告

日時：2002年11月11日(月)18時10分 - 22時20分

場所：電気通信大学総合研究棟6階会議室

[出席] 荒木徹、藤井良一、家森俊彦、井口博夫、歌田久司、大村善治、小野高幸、小原隆博、品川裕之、綱川秀夫、中村正人、松岡彩子、山崎俊嗣、早川基（運営委員補佐）

[欠席] 麻生武彦、橋本武志、渡部重十

1. 新入会員入会

下記2名の入会を承認した。

佐波瑞恵 北大・理学研究科・D3

山谷祐介 北大・理学研究科・M1

2. 会費長期未納者について

3年以上会費未納の会員につき、その取り扱いを検討した。住所不明等で5年以上経過している場合は原則として退会扱いとする。5年未満であっても、会費納入の見込みの無い会員については同様に退会扱いとする。

3. 国際学術交流若手派遣

高崎聡子会員（学生）のAGU Fall Meeting派遣申請を採択した。補助額は、西田国際交流基金より計15万円。

4. 国際学術交流外国人招聘・若手派遣申請締め切り日について

申請時期に柔軟性を持たせるために、国際学術交流外国人招聘および若手派遣について、締め切りを、年4回とし、各募集は6ヶ月間をカバーすること、すなわち、3ヶ月ずつオーバーラップさせることにした。両募集とも、2月、5月、8月、11月の各15日を締め切り日とし、それぞれ、その3ヶ月後から始まる半年間に開催される研究集会对象とする。これに合わせ、内規を改定する。

5. 新分科会の提案について

小野会員他6名の会員より提案のあったSGEPSS分科会「内部磁気圏分科会」設立申請を承認した。

6. EPS運営委員会報告

山崎俊嗣委員（EPS運営委員会議長）より、10月7日に開催されたEPS編集委員・運営委員合同会議につき報告があった。掲載論文の質の向上のためにはもっとregular issueの投稿を増やす必要があることとE-letterの投稿と査読は順調に進んでいること、

特集号として、来年のIUGGのセッションを招待することを検討すべきこと、出版助成金（科研費）申請の様式がかなり変更され、論文の質も厳しく審査される可能性のあることが述べられた。また、EPS賞を2002年掲載の論文より開始することが報告された。

小野高幸委員からは、EPS誌検討WGの意見交換状況が報告された。

7. 役員選挙準備と次回会報予定

12月10日の役員選挙公示に向け、投票用紙等の会員への送付を12月5日を目標に準備をする。選挙関係の書類とともに、会報および名簿を同封するため、会報原稿の締切を11月20日とする。

8. IUGG関係

第112回総会・講演会会場での募金状況について報告があり、初日で約10万円の募金があった。郵便振替用紙印刷につき、IUGG事務局に問い合わせ、間に合うようであれば、役員選挙関係等の発送に同封する。企業からの募金については、活動を進める。IUGGの会場に置くプロジェクターの手配については、事務局の方針決定を待って、対応を検討する。

9. 研連等報告

EPSの議論と関係して、大村委員よりURSIでは、電波関連科学の記事のうち、研究論文については新しい雑誌が発足したことが報告された。

学術会議の改革について、11月中旬に答申が出てパブリックコメントが募集される。総会で状況を報告するとともに、会報にも掲載する。

10. 学会名変更・運営委員増員について

学会名変更の問題については、WGを作って、学会名だけでなく、運営方法を含め検討を継続する。会長挨拶でこの問題にふれるとともに、総会では、検討を継続するに至った運営委員会の考え方を含め、詳細な経過報告を行う。WGの具体的構成を提案し、そのことについて意見を求める。WGの任務は、検討結果を運営委員会に報告・提案をすることで、運営委員会はそれを適切な形で取り入れ、総会にはかる。具体的構成については、役員選挙後の新旧運営委員会引継の時に決定する。

運営委員の2名増員を総会に提案する。それに先立ち、第217回運営委員会で改訂した内規の説明を行い、2名増員が総会で承認された場合には、再度内規の改定を行う。

11. その他

運営委員補佐については、何を補佐するかの役割を明確に定義し、必要な場合のみ運営委員会に出席すればよいこととする。

評議員会報告

日時：2002年11月12日(火) 18:00-20:40

場所：電気通信大学総合研究棟 6階会議室

出席者：大家、福西、国分、鶴田、江尻、本蔵、上出、藤井、松本、荒木

欠席者：西田、河野

議事：

(1) 運営委員会報告：

家森運営委員(総務)より運営委員会の審議内容について報告を受けた。

(2) 学会賞審査

推薦者から推薦理由の説明を受けた後、審査を行い、候補者1名の受賞を決定した。

(3) 学会名変更について

運営委員会の審議経過について会長から説明があり、「ワーキンググループを作り、学会運営の問題も含めて継続して考える」という運営委員会の方針を了承した。

(4) 評議員の増員について

増員と年齢制限について議論した。その結果、増員と年齢制限はしないが、辞退権を認める事にし、運営委員会で具体的手続きを決める事にした。

(5) 札幌IUGG募金への対応について

会長より募金活動の現状について説明があり、

(a) 評議員の個人寄付、

(b) 寄付が期待できる企業名の提案、

(c) 中村募金担当運営委員が企業回りをするときの同行、の3点への協力が要請された。

(6) 「学術会議の在り方」について

主に学会長を対象として学術会議で開かれた「学術

会議の在り方に関する説明会」(10月29日、学会からは歌田運営委員が出席)の概要が上出氏(地球電磁気研連委員長として出席)から報告され、討論を行った。国際組織との対応、総合科学技術会議との関係の2点につきパブリックコメントを会長から提出することにした。

(7) AOGSについて

Asia-Oceania Geophysical Meetingについて、発起人の上出氏から説明を受けた。学会としての対応は、発起人からの手紙が来てから考える事になる。

(8) その他

前回に続き、地球物理関連学会の統合(或いは連合)について意見交換を行った。困難さの認識に評議員間で差があるが、引き続き努力を継続する事で一致した。

会計報告

第112回総会において、平成13年度本会計決算、平成13年度特別会計決算、平成15年度本会計予算案が承認されましたので、以下のとおりご報告します。平成13年度は90万円弱の黒字となりました。これは、会費納入率の向上に取り組んだ結果、過年度分会費を含めて予算を大幅に上回る収入があったことが主な要因です。会員各位のご協力に感謝します。なお、特別会計大林奨励賞決算の支出にあります雑費(選考委員旅費)については、同額を平成14年度本会計より補填します。平成15年度予算は、わずかに黒字の予算となっており、引き続き健全財政を維持できるものと考えております。

(会計担当運営委員 山崎俊嗣・松岡彩子)

平成13年度 特別会計決算 (平成13年4月1日～平成14年3月31日)

(単位：円)

<田中館賞>

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰越金	643,887		
利子収入	336	次期繰越金	644,223
計	644,223	計	644,223

<長谷川・永田賞>

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰越金	405,404		
利子収入	483	次期繰越金	405,887
計	405,887	計	405,887

<大林奨励賞>

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰越金	445,013	賞牌費	15,015
利子収入	302	雑費	48,520
		次期繰越金	381,780
計	445,315	計	445,315

<西田国際学術交流基金>

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
寄付金収入	8,000,000	国際研究会出席補助	150,000
利子収入	2,259	次期繰越金	7,852,259
計	8,002,259	計	8,002,259

地球電磁気・地球惑星圏学会

平成13年度 本会計決算書

(平成13年4月1日～平成14年3月31日)

(単位：円)

収入の部				
科目	13年予算額	13年決算額	差異	備考
会費収入	8,497,000	8,995,293	△ 498,293	
正会員会費	6,960,000	7,410,000	△ 450,000	101% (過年度分を含む) 617名分/610名
学生会員会費	360,000	390,000	△ 30,000	103% (過年度分を含む) 65名分/63名
海外会員会費	150,000	171,293	△ 21,293	47名
シニア会員会費	27,000	24,000	3,000	80% 8名/10名
賛助会員会費	1,000,000	1,000,000	0	20口分 (過年度分を含む) /11社15口
出版助成金	26,700,000	26,700,000	0	平成13年度科学研究費補助金※1
予稿集売上代	650,000	638,200	11,800	第110回総会・講演会予稿集売上等
大会参加費	400,000	395,000	5,000	第110回総会・講演会参加費
利子収入	30,000	15,316	14,684	
雑収入	250,000	82,080	167,920	英文承諾使用料等
小計	36,527,000	36,825,889	△ 298,889	
前期繰越金	3,938,236	3,938,236	0	
合計	40,465,236	40,764,125	△ 298,889	
支出の部				
科目	13年予算額	13年決算額	差異	備考
管理費	2,500,000	2,477,092	22,908	
業務委託費	1,950,000	1,875,573	74,427	(財) 日本学会事務センター事務委託費
通信費	200,000	308,596	△ 108,596	会費請求郵税, FAX代, 事務通信費等
印刷費	150,000	117,068	32,932	第21期副会長選挙書類印刷費等
旅費	50,000	51,360	△ 1,360	
雑費	150,000	124,495	25,505	
事業費	32,875,700	32,398,805	476,895	
会誌分担金	30,095,700	30,095,700	0	分担金 3,395,700円+助成金 26,700,000円
会報印刷費	300,000	267,278	32,722	No.172-174印刷費, 連絡会ニュース
会報発送費	600,000	342,950	257,050	No.172-174発送費
大会開催費	850,000	870,242	△ 20,242	第110回総会・講演会
予稿集印刷代	900,000	796,635	103,365	"
広報活動費	30,000	0	30,000	
名簿作成費	0	0	0	
その他	100,000	26,000	74,000	合同大会時各会議費
基金交流事業費	800,000	658,000	142,000	IUGG援助金, 国際交流事業招聘2名・補助1名
基金繰入金	200,000	342,000	△ 142,000	基金残高13,771,904
予備費	100,000	73,080	26,920	英文承諾使用料運用支出平成13年度分
小計	36,475,700	35,948,977	526,723	
次期繰越金	3,989,536	4,815,148	△ 825,612	
合計	40,465,236	40,764,125	△ 298,889	

地球電磁気・地球惑星圏学会
平成15年度 本会計予算書

(平成15年4月1日～平成16年3月31日)

収入の部				
科 目	15年予算案	14年予算額	13年決算額	備 考
会費収入	8,230,000	8,247,000	8,995,293	会員数は9月末、納入率はH13年度決算参考
正会員会費	7,140,000	6,980,000	7,410,000	12,000円×627名×95%
学生会員会費	310,000	340,000	390,000	6,000円×58名×90%
海外会員会費	150,000	150,000	171,293	
シニア会員会費	30,000	27,000	24,000	3,000円×10名
賛助会員会費	600,000	750,000	1,000,000	50,000円×12口/10社
出版助成金	27,900,000	26,700,000	26,700,000	H14年度科研費補助金を参考に算出
予稿集売上代	650,000	650,000	638,200	第114回総会・講演会
大会参加費	400,000	400,000	395,000	"
JICST英文許諾使用料	50,000	50,000	-	平成15年度E・P・S英文許諾使用料
利子収入	15,000	20,000	15,326	
雑収入	50,000	50,000	82,080	
小 計	37,295,000	36,117,000	36,825,899	
前期繰越金	4,036,458	4,815,158	3,938,236	※
合 計	41,331,458	40,932,158	40,764,135	
支出の部				
科 目	15年予算案	14年予算額	13年決算額	備 考
管理費	2,650,000	2,670,000	2,477,092	
業務委託費	1,950,000	1,950,000	1,875,573	(財)日本学会事務センター事務委託費
通信費	250,000	250,000	308,596	会費請求書発送郵税、事務通信費等
印刷費	150,000	170,000	117,068	印刷費、コピー代等
旅費	200,000	200,000	51,360	運営委員会・評議員会旅費
雑費	100,000	100,000	124,495	
事業費	33,775,700	33,375,700	32,398,805	
会誌分担金	31,295,700	30,095,700	30,095,700	分担金3,395,700円(税込) + 出版助成金額 27,900,000円 (H14年度補助金)
許諾使用料運用支出	50,000	50,000	-	E・P・S運営委員会へ
会報印刷費	300,000	300,000	267,278	年4号発行予定
会報発送費	450,000	600,000	342,950	年4回発送予定
大会開催費	800,000	800,000	870,242	第114回総会・講演会
予稿集印刷代	750,000	750,000	796,635	第114回総会・講演会プログラム・予稿集印刷費
広報活動費	30,000	30,000	0	
名簿作成費	0	650,000	0	
その他	100,000	100,000	26,000	
基金交流事業費	500,000	650,000	658,000	IUGG援助金、国際交流事業費等
基金繰入金	100,000	100,000	342,000	
予備費	100,000	100,000	73,080	
小 計	37,125,700	36,895,700	35,948,977	
次期繰越金	4,205,758	4,036,458	4,815,158	
合 計	41,331,458	40,932,158	40,764,135	

※平成14年予算の前期繰越金は平成13年度決算による。

規約・内規の改定

第112回総会において運営委員の2名増員が承認されました。また、第219回運営委員会において役員選挙の際の評議員の辞退権、および海外研究者招聘事業と若手派遣事業を、従来の年2回から年4回の募集・選考にすることが承認されました。これらの変更に伴い、規約と内規が以下のように改定されました。なお、規約と内規の全文は同封の学会名簿に記載されています。

地球電磁気・地球惑星圏学会規約（抜粋）

第3章 役員

第8条 本学会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員10名、運営委員16名

地球電磁気・地球惑星圏学会内規（抜粋）

第2条 役員の選挙は次の通りとする。

2. 評議員の選出は9名連記無記名投票を行い、得票数の順位に従って上位9名を当選者とする。なお得票同数者がある場合には年長者を当選者とする。評議員については、選挙で選ばれても辞退することができる。

3. 運営委員については下記の様式に従い13名連記無記名投票を行い、合計得票数の順位に従って上位13名を選出する。得票数が同数の場合は年長者を上位とする。新会長は運営委員会の継続性ならびに運営委員所属機関等のバランスを考慮し、新副会長、新旧運営委員と協議の上、定数16名の残り3名を選出する。

主として地球惑星内部・固体物理学を研究する会員から 3名

主として地球惑星大気圏・超高層物理学を研究する会員から 2名

主として宇宙空間物理学を研究する会員から 3名
全会員の中から 5名

ただし同一人を評議員と運営委員に重複して記載してもさしつかえない。なお、3期連続運営委員経験者は次期の運営委員として選ばれても辞退することができ、通算5期経験者は再任を永久に辞退することができる。これらの氏名は選挙に先立ち全会員に通知する。

国際学術交流事業運用規定（抜粋）

補助金受領者の選考：(1),(2)については年4回、(3)については年1回会報で公示し、運営委員会で決定する。なお、(3)については選考にあたって学識経験者よりなる選考委員会を設けることがある。

「学術会議のあり方」についての 説明会（報告）

学術会議のあり方については、総合科学技術会議「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」で検討されていたが、平成14年10月29日、日本学術会議講堂において、その「中間まとめ」についての学術会議側の説明会があった。この会では、日本学術会議「日本学術会議のあり方に関する委員会」によるあり方についての基本的考え方が説明された。また、「中間まとめ」の論点との相違点について詳細な解説があった。「中間まとめ」は11月中旬に公表され、パブリック・コメントが募集されるので、これに対する各学会および各学会会員からの積極的な発言が求められた。

この説明会には、歌田運営委員が会長代理で出席した。学会の対応策を運営委員会（11月11日）と評議員会（11月12日）で議論し、学会としてのコメントをまとめて締め切りの12月3日までに提出することにした。

詳しくは下記ホームページを参照して下さい。
総合科学技術会議の「中間まとめ」

<http://www8.cao.go.jp/cstp/>

学術会議側の見解：SGEPSSホームページ「学術会議のあり方」に関する資料

<http://swdchf.kugi.kyoto-u.ac.jp/sgeweb/news/gakujutsukaigi.pdf>

日本学術会議改革の動向：

<http://www.scj.go.jp/arikata/arikatatop.html>

SCOSTEP専門委員会報告

2004年からCAWSES (Climate And Weather of Sun-Earth System) 国際協同観測研究計画を開始するSCOSTEPは、Science Steering Group (SSG : Su. Basu委員長)を立ち上げて、CAWSESの目的とする太陽-地球系の長期変動（宇宙気候）と短期変動（宇宙天気）の研究と応用のために、4つの大課題を本年8月に決定した。これらは、

- 1) Solar Influence on Climate,
- 2) Space Weather: Science and Applications,
- 3) Atmospheric Coupling Processes,
- 4) Space Climatology

で、これに加えて、教育や社会への情報の発信 Capacity Building and Educationを重要な課題として設定している。

(詳しくはwww.ngdc.noaa.gov/stp/SCOSTEP/scostep.htmlを参照)。このSSGには日本からは上出洋介教授が委員として参加している。

国内ではSCOSTEP専門委員会と国際学術協力事業研究連絡委員会のSTPP専門委員会(委員長:津田敏隆教授)が、ワーキンググループを作り、対応する国内の計画案の検討やとりまとめを行ってきた。その中から、日本が先導的な役割を果たし特段に進展が期待できるが、現在は十分な予算的な対処がされていない、主として地上観測を基にした研究項目を選びだして、特定領域研究として申請することにした。この申請案

(<http://www.stelab.nagoya-u.ac.jp/~scostep>に掲載予定)は既存の観測研究や将来の他の観測研究計画と相補的に協力しあうもので、今後他の観測研究計画グループとの摺り合わせを十分行っていく予定である。

(SCOSTEP専門委員会委員長 藤井 良一)

長谷川・永田賞審査報告

第25号授賞者 国分 征 会員

國分会員は、多年にわたり太陽地球系物理学、とくに磁気圏物理学の研究と教育に尽力するとともに、本学会の運営委員、評議員、会長を歴任し、学会の運営・発展に大きな功績を残されました。学術行政においても、豊かな学識経験に基づき、測地学審議会部会長、日本学術会議地球電磁気学研究連絡委員会委員、学術審議会専門委員、南極地域観測統合推進本部委員、欧州非干渉散乱レーダー(EISCAT)科学協会評議員などを務め、学術の振興に尽力されてきました。

國分会員は、昭和基地とアイスランドの磁場変動記録からジャイアントパルセーションやオーロラに伴う磁場変動の共役性を世界に先駆けて発表し、これらの現象の生成機構について重要な知見を与えられました。また、極域磁場変動から2つの渦を持つ電流系(Sqp)を見いだされましたが、この電流系は後の磁気圏対流モデルと結びつく重要な発見でありました。その後、南極観測や北極域観測などの観測・実験に深く関わり、その研究は、極域地上観測で得られるELF/VLF自然電磁波動、Pc/Pi地磁気脈動、磁場変動、可視オーロラなど、極域に出現する多彩な電磁現象を総合的に捉えるものであり、極域プラズマ対流の特性、太陽風変動とサブストーム

発生、磁気圏波動メカニズム、磁気圏境界面でのプラズマ不安定現象等について次々と新しい成果を発表されました。観測には手作りの観測装置を現場に携行するという基本的な姿勢を実践し、深い物理的洞察により、衛星と地上観測データを総合的に結びつけるモデルを構築してこられました。観測現場で自然を肌で感じとり現象の本質を理解するという研究姿勢は、当学会の若い研究者や学生に強い刺激を与え続けてきました。

ジオテイル衛星計画では、国分会員は、西田会員と協力して指導的役割を果たし、特に、日米共同の磁場観測の主任研究者として高精度の観測を成功させ、磁気圏の尾部・境界層の構造や物理過程に関する数多くの発見を導かれました。この衛星の出した多くの成果は、この確かな磁場観測に支えられています。また、STEP計画の地上観測で日本の主導で行われた高時間分解能磁力計ネットワーク観測の推進にも努力されました。

このように、國分会員は、現在は世界と肩を並べるまでになった我が国の磁気圏物理学の揺籃期からの発展と学術行政・人材育成に大きな貢献をされました。以上の理由により、長谷川・永田賞受賞候補者選考委員会からの選考結果報告を受けた評議員会は、國分会員へのこの賞の授与を決定しました。

なお、今回の長谷川・永田賞の推薦者は、佐藤夏雄、向井利典、藤井良一会員であり、選考委員会は綱川委員長と、大村、中村正人委員から構成されていきました。選考にあられた委員の方々にお礼申し上げます。(荒木 徹)

大林奨励賞審査報告

第14号 篠原 育 会員

「プラズマシートにおける電子加熱と磁場拡散メカニズムの研究」

磁気リコネクションは、磁気エネルギーのプラズマエネルギーへの変換過程として重要であり、異常電気抵抗と磁場拡散がその変換の必要条件となるから、そのメカニズムの解明は宇宙プラズマ研究の中心的課題となっている。篠原会員は、衛星データの解析と数値シミュレーションによってマイクロ・マクロのスケール間結合を取り入れた効率的な異常抵抗・磁場拡散メカニズムを明らかにした。まず、ジオテイル衛星の波動観測データと電子・イオンの速度分布関数の解析から、サブストーム時にプラズマシート磁気リコネクション領域で観測される電磁波

動乱流が、Lower Hybrid Drift Instability (LHDI)に伴う磁場拡散により発生したものであることを実証した。LHDIは磁場拡散の有力候補として注目されていたが、ハイベータ・プラズマでは不安定が成長しにくいという困難があった。この解析は、磁場の曲率を考慮すればその困難が解決することを示した上で、LHDIの線形・準線形理論の結果と精密な比較を行ったものであり、ジオテール衛星で初めて得られたlower hybrid周波数帯をカバーする波動スペクトルの解析として高い信頼性を持つ。さらに、観測された電磁波動乱流スペクトルからLHDIの準線形理論に基づいて計算した異常抵抗は、粒子間衝突による古典的抵抗より10桁以上大きい、サブストーム時の急激な磁場エネルギー解放には十分ではなく、マクロスケールの現象との組み合わせが必要である事を示した。サブストーム時の磁場エネルギー解放を導くに足る十分な磁場拡散過程がLHDIだけでは担えないことを実証したこの研究は、過去30年以上にわたる議論に終止符を打つものであった。

次に、同会員は2次元粒子シミュレーションを用いて、プラズマシートを蛇行させるドリフトキック不安定(DKI)とLHDIの非線形結合により磁場の効率的散逸過程を担うという新しい物理過程を明らかにした。特に、lower hybrid波の斜め伝播を取り入れることにより、電子が磁場方向に強く加熱されflat-top分布関数をもつことを示した。flat-top分布は磁気圏ロープからプラズマシートに輸送される電子に見られる特徴であり、高温プラズマシートの起原の研究に重要な指針を与えている。磁気リコネクションの理解には、速く効率的な磁場拡散の解明が重要である。同会員は高温プラズマシートプラズマと低温マントルプラズマの間の速度差がケルビン・ヘルムホルツ不安定(KHI)を導き、プラズマシートを大きく蛇行させることに着目し、KHIとLHDIの非線形結合による磁場の散逸過程を数値シミュレーションにより研究した。その結果、速い時間スケールで磁場の拡散が進行する事がわかった。これは、マクロスケール不安定(KHI)とミクロスケール不安定(LHDI)の結合により、マクロとミクロスケールのエネルギー・運動量交換が有効に働くことを示し、磁気リコネクションにおける磁場拡散の新しい可能性を示すだけでなく、プラズマシートの高温電子の起源に迫り、当該研究分野の発展を促進する研究と言える。

第15号 齋藤 昭則 会員

「中緯度域電離層電場不規則構造についての研究」

電離圏不規則構造は、1930年代よりイオノソンドのトレースが乱れるスプレッドFの原因として注目されていたが、この研究に質的飛躍をもたらしたのは、大型レーダーによる直接観測であった。中緯度でもMUレーダーによりプリュームと呼ばれる巨大な不規則構造が見出され、これに触発されて衛星観測データの解析が試みられたが十分な成果を挙げるには至らない状況が続いていた。齋藤会員は、衛星電場データ解析から初めてプリューム上縁の電場の不規則構造の解明を行い、さらに国土地理院が運用するGPS受信機観測網による日本上空全域の全電子数(TEC)の二次元分布とその時間変動を初めて示すことに成功した。

齋藤会員は、まずダイナミックエクスペローラー2号衛星により得られた電場データを解析し、プリュームと呼ばれる大規模電離圏不規則構造が波長数10 km、振幅数mV/m、緯度方向に数100kmの広がりをもつこと、特徴的な季節・太陽活動依存性をもつことなどを見出した。続いて、上記の発見を理論的に説明するために、反対半球の電離圏を組み入れ、現実的な電離圏パラメータを適用して、その成因とされるパーキンス不安定の本格的な二次元数値シミュレーションを行った。初期成長率の小さい不安定において、いったんシート状構造が形成されると急速にパーキンス不安定が成長することを明らかにし、さらに、特に東向きの中性風が成長率を左右する要因であることを定量的に解明した。何れも観測結果と見事に整合する結果である。

さらに、齋藤会員は国土地理院の900個以上のGPS受信機からなる稠密なネットワークを電離圏観測に利用することを提唱し、日本上空全域の全電子数の二次元分布とその時間変動を与える新手法を開発して、伝搬性電離圏攪乱の時間空間変動の様子を明瞭な二次元マップとして描き出しました。この擾乱の水平波長が数百 km、周期が約100分で、主として南西方向に伝播することを確かめ、これまでにMUレーダの1地点観測で得られた現象が広域に存在することを明らかにした。特徴的な南西方向伝播がパーキンス不安定の成長と合致することから、変動が電離圏の熱圏大気波動への単なる応答でなく、それ自体がパーキンス不安定から生じている可能性や、変動の特定の位相面で電離圏不規則構造が発生する可能性についても言及し、後の論文でその予測

の正当性を確認した。

最近ではGEONETからTECデータベースを自動構築するシステムを開発し、データ配布を始めている。電離圏研究における多くの新知見はもとより、研究会を積極的に主催するなど同会員の優れたリーダーシップと学会への貢献が高く評価される。

なお、この賞は、大林奨励賞候補者推薦作業委員会（荻野竜樹委員長、小山孝一郎、笹井洋一、渋谷秀敏、丸橋克英、湯元清文委員）から候補者の推薦を受け、評議員会で審査したものです。推薦作業にあられた委員の方々に感謝します。

（荒木 徹）

大林奨励賞を受賞して

宇宙科学研究所 篠原 育



この度は「プラズマシートにおける電子加熱と磁場拡散メカニズムの研究」で大林奨励賞を頂き、大変光栄に存じます。ご推薦頂いた先生方、ご指導下さった先生方、様々な面で私の研究をサポートして下さいました方々に心より感謝申し上げます。自分の研究生活を振り返って見るに、私は常に大変恵まれた研究環境の中にいます。今回の受賞対象である研究成果は、Geotail衛星のデータ解析や計算機シミュレーションによって得られたものです。各種のデータや高性能の計算機の利用を許してくれる環境、好奇心を常に刺激してくれる多くの人々との出会いがなければ、決して得ることができなかった結果だと思えます。いろいろな意味で大変幸運だったのですが、これからは運に頼ることなく実力で勝負していけるように励まなければならぬと思えます。

私がこの分野を強く意識したのは、大学3年の宇宙空間物理学の講義でした。地球物理学科に進学した当時、私は地球流体力学に興味を持っていたのですが、電磁流体力学の世界に初めて触れ、オーロラが宇宙空間の大電流系の一端であることを知り、とても興奮したことを思い出します。私が大学院に進学したのは1991年、Geotail衛星の打ち上げの1年前でした。「Geotailを含めISTPの国際共同観測でこれからどんどん素晴らしい観測データが出てくる」という言葉に惹かれたことが、この分野へ進学することを決めた理由の1つでした。大学院時代にあけぼの等の近地球衛星からGeotailまで幅広い種類のデータに直接触れることができたことが非常に幸運でした。1つの観測器のデータ解析のみで新しい成果を出すことが非常に難しい現在では、できる限りの情報を集めて総合的に解析するような研究スタイルが求められていると思いますが、様々なデータを扱った経験は今の私の大きな糧となっています。

今回受賞対象となったプラズマシートの電子加熱と磁場拡散の問題は、博士課程の時にGeotail衛星のデータ解析から取り組み始めた課題です。博士論文ではデータ解析と簡単な理論計算から研究をしましたが、データ解析のみから言える結論に限界を感じたこともあって、大学院を卒業後に本格的に計算機シミュレーションを使った研究を始めました。私たちの分野の大きな特色は人工衛星による“その場”観測によってプラズマ速度分布関数や電磁場変動を知ることができることですが、その得られた複雑な観測事実の物理を理解する為には計算機シミュレーションが非常に大きな助けとなります。

最近、私たちは無衝突プラズマの基本的な性質として「スケール間結合」という言葉を提唱しました。これは、無衝突プラズマの輸送現象は、様々なスケール（MHD、イオン慣性長、混成長、電子慣性長、等）が動的に結合することによって発動する、という考え方です。従来の標準的なプラズマ物理の考え方ではプラズマ中のスケールは階層化されており、その結合は静的にのみ組み込まれていましたから、私たちの考え方とは対照的です。このような新しい「スケール間結合」の考え方は計算機シミュレーションの助け無しには見出すことは難しかったでしょうし、観測からのヒントが無くては思いつくことはできなかったでしょう。私たちの分野が持つ“その場”観測の利点を活かす為には、今後、ますます観測による実証と理論・計算機シミュレーション連携が大切になると思えます。

私は、今回の受賞は「スケール間結合」の考え方の将来性に与えられたものではないか、と勝手に思

い込んでいます。スケール間結合と関連するプロジェクトとして、実証的な側面では次期磁気圏観測衛星SCOPE計画があります。また、計算機シミュレーションの方でも大規模計算の計画がいろいろと進んでいます。これらのプロジェクトに積極的に参加することによって、少しでも宇宙プラズマの理解に貢献したいと思います。どうぞ今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

京都大学大学院理学研究科 齋藤 昭則



地球電磁気・地球惑星圏学会の第112回総会において第15号の大森奨励賞を頂き、大きな喜びと身の引き締まる思いを感じております。これまでお世話くださいました多くのSGEPSS会員の皆様に心より御礼を申し上げます。特に家森俊彦先生、荒木徹先生、深尾昌一郎先生、Michael Kelley先生、町田忍先生には多くのご指導を頂きました。総会の翌日に東北大学の佐藤光輝さんから「節目節目に、よくやったと褒めてもらえると、やる気が湧きますよね」と言われましたが、その通りで、研究として「よくやった」と言われるレベルには、まだまだ達していないのは本人が重々承知しておりますが、それでもお褒めを頂きますと、恐縮しながらも意欲を新たに研究に邁進しようと言う気持ちが湧いて参ります。お褒めを頂くという事では、私が博士学位取得後にCOE研究員としてお世話になった京都大学宇宙電波科学研究センターの深尾昌一郎先生には、研究者として右も左も分からない様な学生時代から「君の研究は大変面白いからがんばるように」との励ましを頂いたことを思い浮かべます。他人の研究はすばらしく見え、それに比べると自分の結果には

自信が持てない様な時期に、非常に力強い言葉をかけていただいたことはその後この分野で研究が続いている土台になっていると思います。

その後、ポスドクとしてお世話になっている間も、あまり観測経験のなかった私をアメリカSRI internationalのRoland Tsunodaさんとの共同観測や通信総合研究所の野崎憲朗さんや篠原学さんとのフィリピン・セブ島での観測などに参加させて下さるなど、研究の幅を広げる機会をいくつも作っていただきました。現在、私が興味をもっておりますGPSによる電離圏観測もこのRASCでのポスドク時代に始めた研究であります。北海道大学で開かれましたSGEPSSで当時、国土地理院におられた宮崎真一さんがポスターでGPS受信機網の紹介をされていました。宮崎さんは東北大学で大家寛先生のご指導で修士号を取られたこともあり、電離圏へのGPSデータの利用には興味を持たれていたのですが、ご自身ではそのための時間が取れず、私がデータを使わせていただくこととなりました。名古屋大学太陽地球環境研究所の小川忠彦先生もその場におられ「こんだけの数の受信機があれば、なにか面白いことが出てくるよ」と励ましてくださったことを覚えております。そのデータの解析を始めたところ、それまで私が研究を進めておりました中緯度電離圏における電場の不規則構造に性質が一致するような伝搬性の構造が2次元のデータとして捉えられたのには驚き、かつ研究のおもしろさを感じた瞬間でもありました。その2次元のプロットを初めて作り、構造を確認して、さらにその連続プロットを動画にして構造の伝搬を初めて見たとき、ちょうど私の後ろを同じ部屋に机のあった川村誠一さんが通りかかったので、呼び止めようと思ったのですが、あまりにも思い通りの結果が最初から出てきたので、何か人為的なミスで作り出してしまったのではないかと思いい、また舞い上がっている自分が恥ずかしかったこともあって、呼び止めずにもう一度解析過程の確認を始めてしまいました。その後、GPSデータを用いた研究も名古屋大学太陽地球環境研究所の大塚雄一さんや京都大学の津川卓也さんとともに展開させていくことが出来、宇宙研の小山孝一郎先生や野口克行さんにも興味を持っていただいて共同研究の結果も出せました。まだまだいろいろ発展させることの出来る面白いデータだと思っております。

また、光学観測をされている方々にもこの現象に興味を持っていただき、1998年と1999年にFRONTキャンペーンとして光学観測と電波観測の同時観測を展開できたことは貴重な経験でした。通信総合研究所の石井守さん、久保田実さん、名古屋

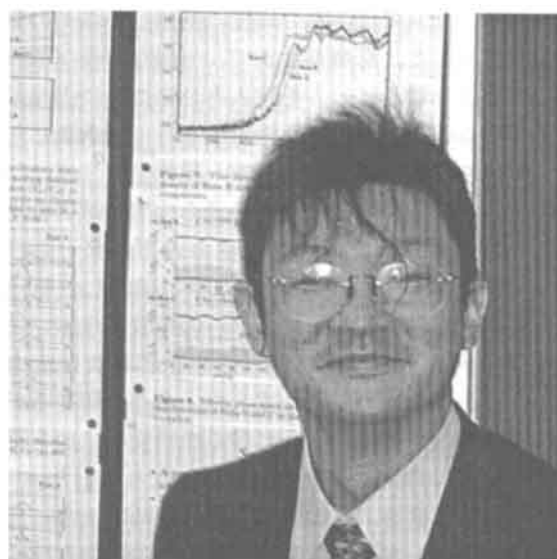
大学太陽地球環境研究所の塩川和夫さん、東北大学の坂野井健さん、高橋幸弘さん、坂野井和代さん、新潟大学の木山喜隆先生など光学機器による観測を進められている方々と共同観測を展開でき、さらに幸運にも、全国5地点で同時の晴天にも恵まれました。久保田さんが作られた5地点の大気光イメージから合成した日本上空の630nm大気光の分布とGPSによる全電子数分布を並べた図は今回のSGEPSSでもまだ引用されるほどのきれいな結果となりました。このFRONTキャンペーンも含め、私の観測および研究に常にご助言とご助力をくださっているのが京都大学宙空電波科学研究センターの山本衛先生でありまして、難しいことでも、あっさりと、かつ非常に合理的に手際よく解決されていかれるので、いつもその姿勢を見習っていきたくております。まずは、科研費の申請書の書き方など細かいところから参考にさせていただいております。また、まねをすれば、私と背格好、容貌が似ていると指摘されることが多い東北大学の藤原均さんには学生の頃からお世話を頂いておりました。藤原さんが京都造形大学におられた前田佐和子先生のところで講師をされていたときには大学が近いことから議論をする多くの機会を持つことが出来ました。ただ、今から思うと、せっかく近くにいたのだから、もっと共同研究が出来たのではないかと残念に思います。また、研究の理論面で目標とさせていただいているのが通信総合研究所の丸山隆先生でして、電離圏に関する幅広い知識と明快な理論構成に、研究者として信頼されるにはこうあらねばならないかと、我が身を思うと忸怩たるものがあります。

改めて振り返りますと、知的刺激を与えてくれる優秀な研究者の方々と興味深いテーマに恵まれ、これまで充実した研究生生活を送ってこられたと思います。それも、私が修士課程の時にDE-2衛星のデータに見られる中緯度電離圏電場不規則構造(MEF: Midlatitude ionospheric Electric field Fluctuations)の解析を勧めてくださり、また博士後期課程に進学するか就職するかを迷っていた私に「急いで就職することもないんちゃう」と気軽に進学を勧めてくださった家森俊彦先生のおかげが大きいです。また、常に、小さな視点ではなく大きな視点に立ち公明正大であれ、ということ言葉をではなくご自身の姿勢で示されている荒木徹先生の影響なしでは私の研究者としての現在はないと思います。取り組んでみたい課題はいくつもありますし、これからも優秀な研究者の皆様とともにそのような課題に挑戦し、新しい面白い成果を出すこと

が出来ればと思っております。今後ともご指導の程、よろしくお願いたします。

国際学術交流事業補助金受領の報告

京都大学 情報学研究科 博士課程
宙空電波科学研究センター
梅田 隆行



このたび国際学術交流事業の補助金を受けまして、2002年8月17日から24日にかけてオランダのマーストリヒトにおいて行われました国際電波科学連合(URSI)第27回総会に参加させて頂きました。このような貴重な論文発表の機会を与えて頂いた学会および関係者の方々に心から感謝申し上げます。今年には既に、ニュージーランドで行われたWPGM及び、オーストラリアで行われたICPPにおいて研究発表をしており、自由に使える旅費もほぼ底をついていました。しかし、「学生のうちに色々な会議に出席して顔を覚えてもらうことは重要だ」と先生方が仰っていたこともあり、本学会国際交流事業に応募させていただきました。私にとってURSI総会への参加は初めてで、これまでに参加した国際会議よりもはるかに大きい規模に驚かされました。その一方、私の隣の家に住んでおられる名誉教授の先生とばったりお会いするなど、世間の狭さも実感しました。私は、“Two-dimensional particle simulations of electromagnetic emissions from electrostatic solitary waves”というタイトルで、GEOTAIL衛星やFAST衛星で観測されている静電孤立波の二次元孤立ポテンシャル構造とそれに伴う電磁界成分に関する計算機実験結果について口頭発表を行いました。

最近の会議において口頭発表のほとんどが招待講演で占められている中、私のような学生がURSIのような大きな会議で口頭発表できるのは好機でした。自分の誕生日という吉日、しかも会場が満員となったちょうど良い時間帯での発表に気が入りました。内容もなんとか理解してもらえたようで、静電孤立波の衛星観測等で有名な先生方から多くの貴重なコメントを頂きました。また、この日の午前と午後のオーラルセッション及び夕方に行われたポスターセッションでは、私の研究に関連した多くの発表がありました。私はこれまで、一様な背景プラズマに境界より電子ビームを注入させることにより、電子ビーム不安定性の計算機実験を行ってきましたが、今後の研究課題である“非一様背景プラズマ”へのビーム注入問題に関しての多くのアイデアを得ることが出来ました。また、夕方のポスターセッションにおいて、口頭発表と内容が関連した電子ビーム生成機構に関するポスターの発表を手伝いましたが、何人かの研究者が「さっきの発表は面白かった」と足を止めてくれました。多くの研究者と議論する機会が持て、そして多くの研究者に顔を覚えてもらえ、非常に有意義な会議となりました。

最後に、URSIへの参加を強く勧めて下さった松本紘先生と、本学会国際交流事業への応募を強く勧めて下さった大村善治先生に感謝すると同時に、あらためて本学会国際交流事業によりこのような貴重な機会を与えて下さった方々に感謝いたします。今後も若手研究者、特に学生の方々がこの制度を利用して海外の学会に参加されることを希望いたします。

宇宙科学研究所 笠羽康正



本学会の国際学术交流事業のご援助を受け、8月17～24日にオランダ・マーストリヒトにて開催されました国際電波科学連合（URSI）第27回総会に出席いたしました。URSIは通信・情報・地球科学・宇宙科学など多くの分野に跨る電波関連科学を包括する国際組織です。1919年の設立以降、歴史的に日本人の貢献も大きく、古くは長岡半太郎氏が会長をされた由。この3年間は、京大RASC・松本先生が会長でした。総会は3年に一度の割合で開催され、10のコミッション（部会）に分かれたパラレルセッションで行われます。私の参加は前回のトロントに引き続き2回目でしたが、一風変わった面白い雰囲気がある会合、という印象を持っています。総会中に各コミッションで開かれる「ビジネスミーティング」にて、3年後の次回総会のセッション内容が全て決まる。総会にやっ来て来ないと意見を反映できないが、そこに来れば誰でもセッションを提案してコンピーナーになれるわけです。久闊を叙しつつ行われる喧々譁々の議論を見ていると（見ているだけでは駄目なのですが、この点の改善は次回ということで・・・）、人間関係は大事だなとしみじみ思います。

近年、日本と欧州の研究者の間では、火星探査におけるNOZOMIとMars Expressの協力関係に端を発し、多くのポスドク研究者のCluster衛星解析チームへの参加、金星探査計画における連携、水星探査計画BepiColomboにおける初の共同プロジェクト実施といった、多様で強い交流関係が築かれつつあります。私の今回の主目的はNOZOMIによる火星プラズマ波動観測の紹介およびPhobos-2観測チームとの議論（結果的にNOZOMIミッションの現況紹介を兼ねることになりました）でした。また、この総会が欧州で行われたこともあり、現在進行形のBepiColombo計画で協力する予定のフランス・スウェーデンなど欧州の電場・波動観測研究者と個々にローカルミーティングを持ち、電場プローブ・サーチコイル・アクティブ実験・水星磁気圏のサイエンスなど、山積した検討事項について突っ込んだ議論の機会を持つことができました。GEOTAIL計画で育った世代で米国のほうが馴染み深かったのですが、ここ数年ですっかり様変わりしてしまいそうです。

URSIはまた、各国の電波科学組織が背景にあるため、「国を背負って」という雰囲気が垣間見える会合でもあります。次回総会（2005年10月）の開催地は、インド・ニューデリーとなりました。近所での開催は、東京（1963）・京都（1993）に続いてまだ3回目のようです。電波科学・宇

宙科学において今後アジア地域の存在は大きくなっていく可能性があります、私はこの国を訪れた経験がなく、次回が楽しみです。

最後に、本国際学術交流事業による貴重なご支援を深謝いたします。

国際学術交流外国人招聘を受けて

テ・ヨン・リー(Dae-Young Lee)



阿寒湖でのマリモ見学船上にて、中央が筆者。

I was invited to the second Korea-Japan-China joint workshop on space weather in Rikubetsu, Hokkaido, which was held on September 2-4, 2002. This joint workshop was organized by Solar-Terrestrial Environment Laboratory of Nagoya University and Kyungpook National University of Korea, and sponsored by Japan Society for the Promotion of Science, Korea Science and Engineering Foundation, and Society of Geomagnetism and Earth, Planetary and Space Sciences (SGEPSS). A number of professional scientists as well as students from Korea have attended this meeting, most of whom were generously supported for their travel from Japanese side. In particular, my travel expense was fully supported by SGEPSS, for which I wish to express my sincere thanks to SGEPSS and Prof. T.Ogino. The trip to Rikubetsu from my home in Korea was a tough one: It took nearly 16 hours, but perhaps the

worst thing is we had a big typhoon approaching toward the Hokkaido area which made my flight nearly the last one that was allowed to land at the Memanbetsu Airport. Once the storm passed, I marveled at the beautiful red and yellow leaves of the Rikubetsu town, one great reward after such a tough travel. In fact I was told later that Rikubetsu is noted for the glorious tints of its autumn foliage. The workshop was very successful enough that we Korean attendants including myself all enjoyed it very much. It was in particular nice to see that students from three countries mingled together during the workshop, which I believe is a good sign for our future relationship between three countries. In science aspect, one of Korean students who works with me closely was greatly stimulated by lively discussions with other attendants including T. Obara, K. Seki, and M. Grande, learning much more things regarding her research topic, Earth's Radiation Belt Relativistic Electron issue. A mini-workshop is expected to be held in Korea some time next year, which will be followed by the third joint workshop in China. Once again, I thank SGEPSS for the generous travel support.

内部磁気圏分科会報告

内部磁気圏分科会は、1)内部磁気圏研究を推進すると同時に、新しい内部磁気圏探査ミッションの実現を目指す。2)地上観測と衛星観測、宇宙工学コミュニティ等、SGEPSS内外の関連分野との交流を推進する。3)国外の内部磁気圏関連ミッションの動向を調査し、国際的な共同研究環境の構築を検討する。4)観測・解析キャンペーンの設定等を行い、共同研究を促進する。を目的として発足した。2002年11月14日に第1回目の会合を持ち、内部磁気圏衛星ミッションの進め方や分科会の進め方等について議論を行なった。メーリングリストやホームページ(<http://www2.crl.go.jp/dk/c231/im/index.html>)の立ち上げも行き、活動は順調にスタートしつつある。

(長妻 努)

アジア-大洋州地球物理学会」 (AOGS) 設立に向けて

AOGSとは？

Asia-Oceania Geophysical Societyの略で、現在シンガポールで法的な登録作業が行われています。西はインド・パキスタンから東は日付変更線までの地域を対象として、AGU (American Geophysical Union) やEGU (European Geosciences Union) のような国際的な組織を創ろうというものです。AOGSは研究者個人から成り立つ組織で、メンバーは各国や地域を代表するものではありません。毎年開催される年会、トピカルなテーマを扱う小シンポジウム・ワークショップ、ジャーナル・書籍の発行が主な活動となります。学会員には、正会員、学生会員、賛助会員の3種類があり、次のいずれかの方法により、登録できます：

- (1) この学会が主催するmeetingsに参加すること (たとえば、1回参加すれば3年間有効など)
- (2) 年会費を払うこと
- (3) 各国の学会員が少額の追加額を払うこと。



なぜAOGS？

アジア - 大洋州地域は

- (1) 人口は世界で最大
 - (2) 急速に発展している
 - (3) 国による格差 (経済, 科学) が大きい
 - (4) 地域特有の地球物理学的課題が多い
- という特徴をもっています。このような地域において、アジア - 大洋州の、アジア - 大洋州の科学者による、アジア - 大洋州の科学者のための国境を超えた学会が必要であると考えます。

Section 構成

AOGSには、次の3つの学問セクションが設けられます：

- 1) SE: Solid Earth (geology, geodesy, geophysics, geochemistry),
 - 2) OA: Ocean and Atmosphere (oceanography, meteorology, atmospheric science, hydrology),
 - 3) SP: Solar Planetary Science (Sun, heliosphere, planets, Earth's upper atmosphere, ionosphere and magnetosphere),
- さらにInterdisciplinary Working Groupsとして
NH: natural hazards, earthquakes, tsunamis, volcanoes, etc
NL: non-linear geophysics,
PR: polar research
などが提案されています。

2004年に第1回Annual Meeting

年会については、AGUやEGUのAnnual Meetingsと重ならない時期に、アジア-大洋州地区の同じ場所 (この地域の中心で、交通が便利なシンガポール) で開くこととし、第1回目は、2004年7月5 - 9日、シンガポール国際会議場で開催されることが決定しております。特別セッションについてのアイデアをお持ちの方は、AOGS Interim Committeeのメンバー (日本からは上出と佐竹が参加) にメールでお知らせください。現在までに提案されているセッションは次の通りです：

- Earthquake mechanisms
- Continental collisions
- Topics in sustainable development research
- Space weather
- Surface isotopedating in Asia
- Subduction zones and volcanism
- Planetary exploration
- Evolution of Western Pacific marginal basin
- Indonesian throughflow and equatorial oceanography
- Monsoons and climate change
- GPS-geodesy

参加料は、450シンガポールドルです。使用言語は、英語で、予稿集も英語です。シンガポール航空が、格安運賃で、世界各地からのフライトを提供してくれる予定です。詳しくは、

Attn: Ms Cheng-Hoon Khoo
A-OGS n Asia-Oceania Geophysical Society
Secretariat, Meeting Matters International
Add: 5 Toh Tuck Link, Singapore 596224
Tel: 65 6465 6730
Fax: 65 6465 6732
E-mail: kch@meetmatt.net

ジャーナル・書籍の出版

総合ジャーナル(専門誌)は、「レター形式」とし、「論文には“この”地域の特長が出ること」などが検討されています。また、EGUが行なったように、各国の既存の英文誌を統合すること、さらにAGUやEGUと共同でジャーナルを出版することなども考えられています。

準備委員会

以下の委員をInterim Council Membersとして、AOGS設立に向けての具体的な議論・準備を開始しました：

W. I. Axford (ニュージーランド) ,
E.-S. Chan (シンガポール) ,
J.-C. Chen (台湾) ,
Y.-Q. Chen (香港) ,
W.-H. Ip (台湾) ,
Y. Kamide (日本) ,
S. Krishnaswami (インド) ,
D.-K. Lee (韓国) ,
K. Satake (日本) ,
J.-L. Su (中国)。

日本からの参加とリーダーシップが期待されています。皆様からのご意見、お待ちしております。ご意見は、上記準備委員会のメンバーにお知らせください。

上出洋介 (名古屋大学太陽地球環境研究所)

kamide@stelab.nagoya-u.ac.jp

佐竹健治 (産業技術総合研究所)

kenji.satake@aist.go.jp

IUGGを支援する募金のお願い

会報でも荒木会長から呼びかけがありましたとおり、来年札幌で開催されるIUGGを資金面で援助するため、主催・協賛学会が主体となり募金活動を行っております。今回のIUGGがアジアで開催される最初の会であるという事もあり、この募金によって集められた資金は、特にアジア地域から参加しようとする若い研究者の参加を援助するために使われます。

当学会におきましても募金活動を開始しておりますが、特に個人の方からの募金は銀行振り込みなどを經由いたしますと、煩雑でもあり、また募金された方のお名前が多数の中に埋もれてしまう恐れもあり

ます。この為、当学会におきましては運営委員会の会計担当が会員の皆様からの募金を取りまとめ、IUGGのLOCに募金者名簿と共にお渡しするという方法も取ることにしました。

その最初の活動といたしまして、今秋の総会の受付にIUGGへの募金窓口を設けました。皆さまのご協力をおもちまして総会受付に於いて以下の51名の皆さまからIUGGを支援する為の募金をして頂き、28万7千円を集める事が出来ました。誠にありがとうございました。

浅村和史、阿部琢美、家田章正、今村剛、
小山孝一郎、笠羽康正、斎藤義文、篠原育、
高島健、中村正人、早川基、前沢洌、松岡彩子、
向井利典、吉川一朗、村田健史、笠原禎也、
河野英昭、田中高史、荒木徹、家森俊彦、
大志万直人、大村善治、斉藤昭則、山本衛、
松井宏晃、山本裕二、山崎俊嗣、小原隆博、
久保田実、坂野井和代、長妻努、柴田喬、
富澤一郎、櫻井亨、綱川秀夫、松島政貴、
岩上直幹、歌田久司、小野高幸、坂野井健、
高橋幸弘、村田功、小川忠彦、荻野竜樹、
塩川和夫、徳丸宗利、池田慎、鈴木勝久、
平原聖文、山本博聖 (順不同、敬称略)

IUGG支援の趣旨をご理解頂き、今学会会報に同封致しました振り込み用紙にてのご寄付を頂ければ幸いです。

なお、この方法では税制上の優遇措置を受けられませんので、まとまった額のご寄付のご意志がございます方は、LOC指定の国際観光興会を通じた方法でお願いいたします。

運営委員会

IUGG募金担当 中村正人

会計担当 山崎俊嗣・松岡彩子

"Advances in Polar Upper Atmosphere Research Vol. 17"への投稿受け付け

国立極地研究所では本研究所の英文ジャーナル "Advances in Polar Upper Atmosphere Research" Vol.17への投稿を下記の要領で受け付けています。本ジャーナルは、極地研シンポジウムでの発表論文とともに、極域超高層物理学分野全般に亘る論文・研究ノート・レビュー・報告を投稿頂き、年々の当該分野研究発展の里程標となるレフリードジャーナルの役割を果たす

べきものとして年1回出版しております。投稿原稿は、国内および国外計2名のレフリーによる査読（報告は1名）を経て、編集委員会で採否が決定されます。採録されたものについては出版後別刷り50部を送付します。会員各位の積極的な投稿を歓迎いたします。

記

締切 平成 14年 12月 20日（金）

発行 平成15年 8月

投稿規程の概要

投稿種別は研究論文、研究ノート、レビュー、報告です。範疇を明記のうえ、原稿1部とコピー2部を下記宛送付下さい。原稿の採否等は国立極地研究所編集委員会で決定します。

投稿細則等についての問い合わせおよび論文送付先
〒173-8515 東京都板橋区加賀 1-9-10

国立極地研究所 麻生 武彦

Tel 03-3962-4756 Fax 3962-5701

高浜 信子（補佐）

Tel 03-3962-4646 Fax 3962-5742

e-mail : editor@uap.nipr.ac.jp

関連研究会のご案内

2004年環境電磁工学国際シンポジウム

2004 International Symposium on Electromagnetic Compatibility/Sendai (EMC'04/Sendai)

開催期間： 2004年6月1日（火） - 6月4日（金）

開催場所： 仙台国際センター

（〒980-0856 宮城県仙台市青葉区青葉山）

人事公募

京都大学大学院理学研究科リサーチフェロー

1. 募集人員：5 - 10名
2. 研究分野：数学、物理学・宇宙物理学、地球惑星科学、化学、生物科学
3. 応募資格：博士の学位を有するか着任時までに取得見込みの者で、着任時35歳以下の者
4. 待遇：非常勤研究員（年収約400万円程度）
採用期間は1年（評価に基づき3年まで更新可）
5. 提出書類等、詳細は、理学研究科ホームページ（<http://www.sclib.kyoto-u.ac.jp/kusci/index-j-top.html>）を参照願います。

新規学位者取得リスト

0. 長尾大道 1. 京都大学 2. 博士（理学）
3. Characteristics of Geomagnetic Jerks and Their Relation to Lower Mantle Conductivity Anomalies
4. 2002年7月23日

広野求和氏の死を悼む



広野さんの死亡通知を新聞で見た。早速、夫人宛てに弔電を打った。病気だと聞いていたが、少し早すぎた死と感じた。享年80歳。私が旧制大学院生として研究室暮らしを始めた時、若手の先頭に立って居られた先輩であった。大変緻密な頭脳の持ち主で、大きな刺激を受けた先輩であった。性格は穏やかで、口数の少ない、もの静かな方だ。大柄な夫人は、暖かい、朗らかな性格の方である。お二人とも、キリスト教聖公会の信者である。私が京大地球物理教室の同じ長谷川研究室で暮していた頃、彼は電離層電磁力学の理論研究を進めておられた。磁気赤道ジェット電流の彼の理論は見事であった。やがて郵政省電波研究所に移り、そこでレーザーの研究を始めた。後、九大の物理学教室の教授になり、そこでレーザー・レーダーを開発し、これが新しい大気観測技術になる可能性を、初めて、明らかにした功績はすばらしい。この業績は、お弟子さんにより今でも受け継がれて発展している。この20年、彼にはお目にかかっていない。残念至極だ。ご冥福を祈る。

加藤 進

賛助会員リスト

エコー計測器（株）

182-0025
東京都調布市多摩川2-3-2
tel. 0424-81-1311
fax. 0424-81-1314
URL <http://www.clock.co.jp/>

（有）オプティマ

134-0083
東京都江戸川区中葛西5-32-8
tel. 03-5667-3051
fax. 03-5667-3050
URL <http://www.optimacorp.co.jp/>

クローバテック（株）

180-0006 武蔵野市中町3-1-5
tel. 0422-37-2477
fax. 0422-37-2478

国際電子工業（株）

164-0014 東京都中野区南台5-34-10
tel. 03-3384-4411
fax. 0426-61-8533
URL <http://homepage2.nifty.com/kokusaidenshi/index.html>

（有）テラ学術図書出版

158-0083 東京都世田谷区奥沢 5-27-19
三青自由ヶ丘ハイム2003
tel. 03-3718-7500
fax. 03-3718-4406
URL <http://www.terrapub.co.jp/>

（有）テラテクニカ

206-0812 稲城市矢野口 3266-1
ランド式番館
tel. 042-379-2131
fax. 042-370-7100

（株）夏原技研

532-0012 大阪市淀川区木川東 3-6-20
第五丸善ビル
tel. 06-6390-8418
fax. 06-6390-8436

NEC東芝スペースシステム(株)

224-8555 横浜市都筑区池辺町4035
tel. 045-938-8230
ext: 8-399-2590
fax. 045-938-8324
ext: 8-399-2559

富士通（株）宇宙システム部

261-8588 千葉市美浜区中瀬 1-9-3
富士通システムラボラトリ
tel. 043-299-3247
fax. 043-299-3012
URL <http://jp.fujitsu.com/>

丸文（株）営業本部航空宇宙部計測機器課

103-8577 中央区日本橋大伝馬町 8-1
tel. 03-3639-9821
fax. 03-3661-7473
URL <http://www.marubun.co.jp/>

大林奨励賞の推薦について

大林奨励賞候補者の推薦を受け付けています。大林奨励賞は「本学会若手会員の中で独創的な成果を出し、さらに将来における発展が充分期待できる研究を推進している者に、賞状及びメダルを授与する」となっております。対象候補者は「本学会若手会員（若手会員とは当該年度初めに、原則として35才以下の会員をいう）の中、地球電磁気学、超高層物理学、及び地球惑星圏科学において、独創的な成果を出しさらに将来における発展が充分期待できる研究を推進している者」で本学会会員からの推薦を平成15年1月31日（金）まで受け付けます。推薦/問い合わせ先：大林奨励賞候補者推薦作業委員長：荻野竜樹（名古屋大学太陽地球環境研究所）です。詳細は、次の学会賞関係年間スケジュールのHomepageをご覧ください。

<http://swdchf.kugi.kyoto-u.ac.jp/sgeweb/gakkaishou.html#PRIZE>

学会賞・国際交流事業関係 年間スケジュール

下記のように改訂いたしました。
積極的な応募・推薦をお願いします。
詳細は、学会ホームページを参照願います。

訃報
宮越潤一郎氏
鳥取大学名誉教授
平成14年6月1日
御逝去 72歳

賞・事業名	応募・推薦/問い合わせ先	締め切り
長谷川・永田賞	会長	2月末日
田中館賞	会長	8月末日
大林奨励賞	大林奨励賞候補者推薦作業委員長	1月31日
国際学術交流若手派遣	学会事務センター	2, 5, 8, 11 各月の15日
国際学術交流外国人招聘	学会事務センター	2, 5, 8, 11 各月の15日

SGEPSS Calendar

- [2002年]
- 12月6日～10日： AGU 2002 Fall Meeting San Francisco, U.S.A.
- [2003年]
- 4月7日～11日： EGS-AGU Joint Assembly Nice, FRANCE
- 6月30日～7月11日： IUGG 2003 Sapporo, JAPAN
- 12月8日～12日： AGU 2003 Fall Meeting San Francisco, U.S.A.
- [2004年]
- 5月17日～21日： Joint AGU-Canadian Geophysical Union (CGU) meeting Montrial, Canada
- 7月5日～9日： The First Asia-Oceania Geophysics Society Meeting Singapore
- 8月16日～20日： Western Pacific Geophysics Meeting Honolulu, Hawaii
- [2005]
- 7月18日～29日： IAGA General Assembly Toulouse, FRANCE

地球電磁気・地球惑星圏学会 (SGEPSS)

会長 荒木 徹 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科
TEL: 075-753-3951 FAX: 075-722-7884 e-mail: araki@kugi.kyoto-u.ac.jp

総務 家森 俊彦 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科
TEL: 075-753-3949 FAX: 075-722-7884 e-mail: iyemori@kugi.kyoto-u.ac.jp

庶務 小原隆博 (会報担当) 〒184-8795 東京都小金井市貫井北町4-2-1
通信総合研究所 電磁波計測部門 (宇宙天気)
TEL: 042-327-6431 FAX: 042-327-6661 e-mail: T.Obara@crl.go.jp

運営委員会 〒113-8622 東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21 学会事務センター気付
TEL: 03-5814-5810 会員業務 (入退会、住所変更等、会費、会誌)
TEL: 03-5814-5801 学会業務 (庶務、窓口、渉外)
FAX: 03-5814-5820